Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-15

ウィリアム・ハズリットのワーズワス批評 : 無私性の哲学と自我の文学

松家, 理恵

(Citation)
近代,117:85*-110*

(Issue Date)
2018-02

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010148

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010148

ウィリアム・ハズリットのワーズワス批評
―無私性の哲学と自我の文学

松　家　理　恵

はじめに

1814年7月にワーズワスが発表した長詩 *The Excursion*（『逍遙』）は、有力誌『エディンバラ・レヴュー』の編集者フランシス・ジェフリーが「これはだめだ」（“This won't do”）と切り捨てたように、当時まともに批評に取り上げられることがなかった。ただ唯一の例外が、8月から3回にわたって『イグザミナー』誌に連載されたウィリアム・ハズリットの批評だった。[1] それは以下のような惜しみない讃辞の言葉で始まる。

> 知性の力において、高遠なる構想において、作品の隅々まで行きわたりすべての対象に超自然的で超人間的と言えるほどの重要性を与える純真かつ崇高な感情の深さにおいて、この作品を凌駕するものはほとんどなかった。(19：9) [2]

この批評を初めて読んだ際のワーズワスの喜びの反応からもうかがえるように、批判的な批評しかなかった当時において、ハズリットの批評が、ワーズワスの詩人としての才能とその作品の特質についての評価を世に示したことの意味は大きいだろう。[3]

だが、そのような最大級の称讃に続くのは、この作品（あるいは詩人）の特質についての、批判とも受けとれるハズリットらしい鋭利な雄弁である。しかし『人間の行為の原理についての試論』（*An Essay on the Principles of Human Action*）（1804）に示された想像力の無私性の理論に照らしてみれば、ワーズワ

スを当代一の詩人とするかれの批評の中に、辛辣なトーンが含まれているのはむしろ当然とも言える。なぜならハズリットの批判は、具体的にはこの詩の物語の進行の遅滞、そしてとりわけ詩の題材の卑小さの問題に向けられてはいるものの、批評の焦点は、詩人の徹底した「自己中心性」(“egotism”)に置かれているからである。

本論では、この *Excursion* 批評および講義“On the Living Poet”(1818)、そして *Table Talk*(1821)所収の“On Genius and Common Sense”におけるワーズワス批評を執筆年代順にたどり、ハズリットの批評のトーンおよび論点の微妙な変化にも注意を向けながら分析する。それによってわれわれは、いわゆるロマン主義の時代において、18 世紀の啓蒙思想の系譜上にある無私的(あるいは共感的)想像力論の視点からの批判的分析によって、またシェイクスピアのドラマ的想像力との対照において、あるいはまたフランス革命の熱狂とその後の政治的反動の時代を生きた知識人の絶望と憤怒の熱い熾火の中で、新しいロマン派的自我の文学としてのワーズワス像が、批評の新時代を拓いた鋭い刀のような名文によって鮮明に刻まれる瞬間に立ち会うことになるだろう。

想像力の無私性論とシェイクスピア

ハズリットの批評の軸となったのは、常にその想像力論であった。それはかれの最初の著書で唯一の思想書である『人間の行為の原理についての試論—人間精神の生得的公平無私性を擁護するための議論』(以下 *Essay* と表記)において、シャフツベリやハチスンの思想を受けつぐ道徳論として提示された。その中で想像力は、人間精神が生まれつき善を愛し、自己に対する関心と同じく他者への共感能力を持つことの基盤としての役割を担っている。[4] すなわちハズリットによれば、意志的存在としての人間の関心の対象となる自己は、すでに存在した(したがって変更不能な)過去や現在の自己ではなく、未来の自己に限られるが、その未だ存在しない未来の自己に対して私は、過去や現在の自

己とは異なり記憶によってあるいは感覚や意識によって直接的に結ばれてはいない。それゆえ私の行為にかかわる（未来の）自己への関心は、他者に感情移入する場合とまったく同じく、ひとえに「想像力」の働きに依拠することになる。そしてこの想像力の働きからすれば、未来の自己と他者との間に対象としての本質的な区別はない。*Essay* の冒頭近くで、それは以下のように要約される。

> 私が未来のことがらを予期し、あるいはそれに関心を寄せることができる唯一の手段は想像力であり、その想像力によって私が自己の未来の存在へと投げ込まれ、それに関心を寄せるのとまったく同じプロセスによって、私は自己自身から他者の感情の中へと運び出されるのである。もし私が他者を愛することができなければ、私自身を愛することもできないだろう。この意味において自己愛とは、その根本的な原理において公平無私の善意と同じものである。（1：1-2）

つまりハズリットにとって想像力とは、今ここに在る自己を出て、未だ無い存在あるいは他者の存在へと入る能力と言ってよいだろう。かれが *Essay* で主張した人間精神の「無私性」（“disinterestedness”）は、この想像力の無私性の理論に基づいているのである。

そのような無私的想像力（あるいは共感的想像力）は、かれの文学批評においても一貫した焦点であり基準であった。[5] そしてその基準に照らしてハズリットは *Table Talk*（1821）所収の天才論“On Genius and Common Sense”において、シェイクスピアの才能を「天才の定義を超えた天才」として讃え、変身能力で名高い古代ギリシアの海神になぞらえるのである。

> かれの天才は、己が選んだものに自在に自己を変身させる能力にあっ

た。かれの独自性は、どんな対象であれまさに他者が見るであろう視点から見ることができる能力にあった。かれはまさに人間の知性のプローテウスであった。(8：42)

シェイクスピアに見られるこの変幻自在な他者（すべての登場人物）への自己移入こそ、ハズリットの考える想像力の究極の様態である。そしてそのような想像力にとっては、もはや自己という存在はほとんど意味がない。

かれはほとんど自分自身の個としての存在を持たないように見える。そして他者の存在を思うままに借り、「あらゆる種類の未経験の存在」を次々と経験するように見える。――ハムレットになったかと思えば、オセローに、またあるときはリア、あるときはフォールスタッフ、またあるときはエアリアルになるのである。(4：23)

「腹話術師のごとき技で、その想像力を自己の外へ投げ出す」(5：50) この自己移入の能力によって、シェイクスピアの登場人物たちは、それぞれが独立した個性を持つ存在としてのリアリティを獲得しているとハズリットは考えるのである。

Excursion 批評 (1814)：ワーズワス文学の特徴としての自己中心性（エゴティズム）

では、この無私的想像力の基準に照らすと、ワーズワスの詩についてはどういうことが言えるだろう。まず、ハズリットの最初の本格的ワーズワス批評である『イグザミナー』誌に連載された 1814 年の *Excursion* 批評、“Character of Mr. Wordsworth's New Poem, *The Excursion*” から見ていくことにする。本論の冒頭で紹介したように、この批評は荘重な讃辞で始まるが、それには次のような文章が続く。

もしこの詩の題材が詩人の天才に比肩するものであったなら、もし題材を選ぶ際のかれの判断力がその題材に対してかれがふるった力と釣り合うものであったなら、もし（人物であれ事物であれ）かれが自己の感情の伝達手段として利用したそれらの対象が直接的かつ否応なくその感情を十分な強さと深さにおいて他者に伝えるものであったなら、われわれの眼前にある作品は、確かにかれ自身が願ったように作者にふさわしくまたかれの故郷にふさわしい「記念碑的作品となった」ことだろう。（19: 9）

つまり称讃はけっして手放しではない。「もし…であったなら」という仮定条件を重ねることによって、ワーズワスの故郷である湖水地方の田舎の人々や田舎の風景を詩の題材とした点が、この詩の欠点としてむしろ強調されている。ハズリット自身が抱く田舎の人間に対する軽蔑や反感は、この批評の3回目（最終回）の後半で「田舎の人間は互いに憎みあっている」という文で始まる長い批判の爆発となって吐露されていて読者の目を引くが、かれの批評の焦点は、そのような（ハズリットから見れば）取るに足らない対象を崇高な詩の題材に選ぶワーズワスの詩人としての特質そのものにある。

ハズリットによれば、*Excursion* は「田舎についての詩というよりもむしろ田舎への愛についての詩」である。つまり詩人にとって重要なのは、描かれている田舎のイメージやできごとそのものではなく、それらにまつわる自己自身の感情であり思索である。「かれの思考こそが本当のテーマである」とハズリットは明言する。その結果、読者は詩中の自然の描写を、瞑想する詩人の内面の霧の中で、その霧を通して、ぼんやりと眺めることになるのである。

かれは印象的な題材やできごとの注目すべき組み合わせはほとんど使

わない。そういったものは概して自己の精神の働きを邪魔するものとして、また自己の感情のなめらかで深く荘重な流れを乱すものとして拒絶するのだ。かくしてかれの描く自然の光景は、形態や環境によって肉眼にくっきりと焼き付けられることはなく、あらゆる対象は数知れぬ詩人の回想という媒介を通して見られ、きらきらと輝く霧のような想像力のかすみに包まれ、過剰な壮観で不明瞭となり、白昼夢のごときぼんやりとした輝きを持つのである。(19：10)

同じことが人物描写にもあてはまる。ワーズワスが田舎の人間を好んで描くのは、かれらの素朴な感情がかれ自身の感情の妨げにならず、己のアイデンティティーに容易に溶け入り、あるいは人類一般という普遍的抽象的な観念と溶け合うからだとハズリットは指摘する。つまりワーズワスには、複雑で深い感情と思考を持った、独立した個としての他者に対する関心が欠如している。かれの関心の対象は結局のところ自己自身でありそれ以外になく、「強烈な知的自己中心主義(エゴティズム)がすべてを飲み込んでしまう」。*Excursion* は三人の人物が語る長い対話の形をとっているとはいえ、それは詩人自身の中のさまざまな思考を表現する「同一人物の独白」に過ぎないというのである。(19：11)

ここでハズリットが、ワーズワスの資質をシェイクスピアが体現する他者への自己移入の能力との対比において語っているのは明白である。かれは *Excursion* の中の対話をワーズワスが気に入らないと言った『ジュリアス・シーザー』の中の対話になぞらえ、かれの登場人物にはドラマ的な性格の区別がないと批判し、ワーズワスの詩人としての特質は「ドラマ性とは正反対」であると断言する。[6] そしてその徹底的に内省的な性質のゆえに、ワーズワスの想像力は単調とも言える自然の事物――つまり主体的にこちらに働き掛けることのない、したがって己の思索を邪魔することのない、むき出しの山や無言の雲――へと向かうのだと以下のように力説して、1回目の批評を閉じるのである。

しかしワーズワス氏の精神の明らかな領域と傾向は、ドラマ性とは正反対のものである。それは登場人物のあらゆる変化、光景のあらゆる多様性、舞台あるいは実人生のあらゆる騒ぎ、仕掛け、パントマイム、その他何であれ己の活動を和らげたり休めたり方向転換させたりするようなものすべてに対して、己との張り合いを妬んで抵抗する。かれの精神の力は己自身を食い物にする。あたかも己と宇宙以外何も存在しないかの如くである。かれは自己の心の多忙な孤独の中に生きている。思考の深い静寂の中に。かれの想像力は、「裸の木々とむき出しの山」に命と感情を与え、目に見えない大気の広がりに人を住まわせ、無言の雲と対話するのだ！（19：11）

これに続く二回目の批評は、ワーズワスが対話というドラマ形式ではなく、抽象的な「哲学詩」の形をとっていればよかったという指摘で始まる。それは批判というよりもワーズワスの資質とかれが選んだ形式との不一致を嘆く言葉であり、それに続けてハズリットは、「人間の生についてのかれ［ワーズワス］の感慨と思索には、その思考内容と表現の両方において、深さ、独自性、真実、美、そして威厳があり、それによってかれは疑いなく当代随一の詩人に位置づけられる」（19：11）と、ワーズワスへの高い評価を表明する。

ただしここでも、ハズリットがワーズワスの文学を評する際に、その対極としてのシェイクスピアを意識していたことは、ワーズワスの自然への愛と自己への排他的関心との関連性についての分析に忍ばせた、ハムレットのイメージからもうかがえる。

おそらくこの哲学的詩人自身の自然への愛は、自然が与えてくれたかれ自身の感情を分析する機会、またかれ自身の力について思索する機会

に負うているのだろう。――つまり自然は、自分の周りのあらゆる対象を自分のお気に入りの思索を映し出す姿見となし、ゆったりと邪魔されることなく威厳に満ちた高みから他者の弱点を見下ろす機会を与えてくれたのである。(19：15-16)

ハムレットが旅役者たちに説いた劇の真髄は、「自然にむかって鏡をかかげる」こと、誇張も虚飾も勝手な解釈もせず、ありのままの真実を映し出すことだった。それに対してワーズワスが自然に対してかかげる「姿見」(“a whole length mirror”) は、自然そのものを映すのではなく、詩人自身の内面を映す鏡だというわけである。

では、ワーズワスが自己の崇高な思索の表現としてあえて日常的で卑小とも言える題材を選んだのはなぜなのか。その理由についてハズリットはさらに以下のような心理的分析を行っている。

> 実際のところワーズワス氏の精神には（あえて憶測を言うならば)、なんであれ詩人の解釈抜きで独自に語るものを認めることへの嫌悪――直接的影響に対する気難しい反感――、自己の題材と栄誉を分かち合うことに対する故意の抵抗が認められる。(19：12)

この文章には、自己中心的で尊大な詩人の性格に対するハズリットの反感が読み取れるが、好悪は別にして、この徹底して自己へと向かう関心、内省的思考の深さこそ、ハズリットが見抜いたワーズワスの特質であり、また強みであった。その類まれな「内的な力（“internal power”)」の強さによって、最も些末な日常の出来事や自然の事物が、詩人の内面の崇高な高みにまで引き上げられるのである。

外的な印象の刺激を求めないかれの精神の支配的な習慣によってか、あるいは多様な形姿にあふれた想像力の欠如によって、かれはありふれた日常のできごとや自然の事物を取り上げる。あるいは最も単純で貧弱な効果しか持たないものを探し求めると言ったほうがよい。そうしてかれは自己自身の精神の蓄えから、そのようなものに関心の重みを付与し、もっとも取るに足らないものを重大で畏怖の念を呼び起こしさえするものに変えるのだ。他のあらゆる関心事は、かれ自身の思考のより深い関心の中に吸い込まれ、同じ地平に達するのだ。かれの精神は、題材の小ささを大きさに変え、その卑しさを気高さに変える。それに己の力を貸し与え、借り物の荘厳さをまとわせるのだ。

「――路傍に咲くありふれた花ですら、
しばしば涙よりも深い思考をもたらすのだ」(19：19)

このワーズワスの「オード」(“Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood”)(1807)の最終行からの引用は、ハズリットの批評における引用の巧みさの一例と言えるだろう。つまりオードの結末はハズリットの批評の文脈に組み入れられることによって、批評家の議論に対する詩人自らの証言としての響きを与えられているのである。

こうしてハズリットは *Excursion* の批評を通して、徹底した自己中心性と哲学的思考の深さ、そしてその結果としての素朴な田舎の自然と人の描写を、ワーズワスの作品全般にわたる特質として読者に提示する。すなわち批評家として看過できない欠点はあるにせよ、「総じてワーズワス氏の詩は、自己と自然とのみ語らう洗練された思索的な精神の物語」であり、「かれは自然への愛を他のどんな詩人よりも巧みに描いた」(19：19-20)というのが、ハズリットが旧知の詩人に捧げた真摯な称讃だったのである。

フランス革命をめぐる確執

『イグザミナー』誌に掲載されたこの *Excursion* 批評は、1817 年にエッセイ集 *Round Table* の中に“Observations on Mr. Wordsworth's Poem *The Excursion*”として再録されるが、そのときハズリットは最初の批評に若干の手直しを加えている。修正点の中で特に目につくのは、冒頭の荘重な称讃の文章が削除され、それに続く「もし…であったなら」という仮定を列挙する文章が、批評の最後に、つまり結論として置かれていることである。ブロムウィッチが指摘するように、この変更によってこの批評全体のトーンは、称讃から疑念 (あるいは批判) へと変わってしまったように思われる。[7]

この変化の理由を考察するには、そしてハズリットの *Excursion* 批評に（最初の版においてはより秘められた形で）含まれるワーズワスへのより感情的な批判を理解するためには、ハズリットのその後の人生に暗い影を投げかけることになるワーズワスとの関係、その確執の歴史に触れないわけにはいかない。またそれによって、なぜワーズワスが、*Excursion* への好意的批評の筆者がハズリットだとわかった途端に激怒し、報復として陰湿な個人攻撃を行ったか、という理由も推測できることになるだろう。

ハズリットがコウルリッジを介してワーズワスに初めて出会ったのは、1798 年、まだ 19 歳の時で、ワーズワスたちが *Lyrical Ballads* を出版する以前に遡る。すでに *Essay* の思想を胸に温めていたハズリットは、そのときかれらに対して「人間精神の無私性」の理論を説き、ワーズワスが構想していた壮大な哲学詩 *Recluse*（*Excursion* はその一部となる予定だった）の基盤となるかれの「賢明なる受動」の哲学を論破する。気分を害したワーズワスはハズリットに向かって「その理論にはもっともなところもあるが、靴屋なら誰でも思いつきそうなものだ」と言い放ったとされる。[8]

このエピソードは、ハズリットの *Excursion* 批評に対してワーズワスの取っ

た行動を予示している。ワーズワスが郵送されてきた『イグザミナー』を受け取ったところに立ち会った友人ウィルソンからハズリットが聞いたところによれば、ワーズワスは友人が読み上げ始めた批評に「きわめて賢明なものだ」と繰り返し、途中からは自らそれを手に取って最後まで朗読し、「実によく書けている。これほどのものは期待していなかった」と上機嫌だったという。ところがその筆者がハズリットだと知らされるや激怒し、その結果、10年以上前の1803年に湖水地方に滞在中にハズリットが引き起こした土地の娘をめぐる村人との騒動を、友人知人に（ハズリットの友人やハズリットが寄稿する雑誌の編集者を含めて）言いふらしたのである。[9]

『イグザミナー』掲載の批評に対するこのワーズワスの態度からは、かれの強い自尊心がうかがえる。かれが態度を急変させた理由の一つは、それを書いた批評家がまだ将来のまったく見えなかった若造の時から知っている、自分よりも８歳も年下の人間だったということである。自分より知識においても経験においても下位だと考える人間によって自分の作品が批評の俎上に載せられること自体、我慢ならなかったのだろう。[10] しかも腹立たしいことに、まだほとんど世間に評価されない自分に対して、ハズリットはその時すでに批評家としての名声を確立していたのである。その年下の男に、「自分が発表した作品についての初めての好意的記事」への恩を負うことが、ワーズワスには屈辱的に感じられたのだと、後にハズリット自身が分析している。(9：6) このようなワーズワスの尊大な自尊心についてのハズリットの認識は、すでに最初の *Excursion* 批評にも読み取れるが、それは後の英国詩人についての講義の中で、より鮮明な形で表出されることになる。

しかし *Excursion* 批評以降の二人の間の確執の高まりのより大きく根深い原因は、フランス革命をめぐる両者の態度の違い、ハズリット側から見ればワーズワスの政治的転向に求められるだろう。ハズリットがコウルリッジとワーズワスに出会い、議論に熱中した時期、かれらは（あるいは少なくともかれらが

それ以前に書いていた作品においては）まだフランス革命の理念への共感をハズリットと共有していた。しかしハズリットが当時の政治的理想を捨てず終生共和主義者を貫いたのに対し、ワーズワスは革命の進展とナポレオン戦争によるイギリス国内での反動的思潮に同調するかのように体制側へと立場を変え、地元の貴族の庇護を受け、トーリー党支持者となるにいたる。*Excursion* はその貴族ロンズデイル伯爵に捧げられたものであり、その中でかれは、三人の登場人物の一人 Solitary（隠遁者）の姿を通して、フランス革命への失望を諦観的高みから批判的に語っている。

ハズリットは *Excursion* への批評を書くことについて親友チャールズ・ラムに、何年も前にその作品の草稿を読み、期待に満ちて出版を待ち望んでいたゆえに、この作品をそれ以上誉めたたえられないことに涙したと語ったという。[11] ハズリットの失望が、作品中のフランス革命をめぐる対話によってより深いものとなったことは想像に難くない。かれは批評の中で「この作品で最も興味深い箇所の一つ」として、フランス革命の興奮に共感し再び人の世へと希望と喜びに満ちて戻った隠遁者が、革命の崩壊と英国における急激な反動の動きに失望した自分の過去を語るくだりを引用する。[12] さらにそれに続いて、極端に走った結果の敗北をむしろ当然とする Sage（賢者）の言葉を引用したハズリットは、ワーズワスがほのめかすような、「いつの日かわれらの勝利、徳と自由の勝利が完結するだろうという楽観的な結論」を受け入れることはできないと宣言する（19:17）。[13] それは現実の困難さ、人間の性（その利己心、頑迷な偏見、権力欲、等々）からすれば「不可能なこと」を実現すると言っているのと同じであり、ワーズワスの結論はあまりに安易な気休めにほかならないと攻撃するのである。この行間には、フランス革命後の反動の時代を、希望が無残にも打ち砕かれる苦々しい現実と向き合って生き続けてきた人間が、その現実に迎合するようにあっさりと若き日の信条を捨て、現実の世を離れ、楽観的な瞑想に逃避したかに見える詩人に対して抱く、失望と憤懣がたぎっている。それに続

く（ここでもワーズワスのオードの詩行が巧みに取り込まれた）文章は、名文家として名高いハズリットの文章の中でも特に記憶に残るものの一つである。

あらゆることは前に前進するのではなく、終わりなく廻る。われわれの力はわれわれの弱さの中にあり、われわれの美徳は悪徳の上に築かれる。われわれの能力はわれわれの存在と同じく限りがあり、足を置く大地よりも上に人の本性を持ち上げることはできない。だが、理性と経験が追い散らしてしまった淡く、実体のない夢をもう一度織り上げることはできないけれど、

「それが何だというのだ。かつてはあれほど明るかった輝きが、
とこしえにわれわれの視界から消えてしまったけれど、
草に栄光が、花に壮麗が宿っていたあの時を
何ものも取り戻すことはできないけれど」——

しかし、われわれは決して止めることはしない。想像力の翼に乗って若き日のあの輝かしい夢へと戻ることを妨げられはしない。あの自由の明けの明星が昇る輝かしい夜明けへと、人類の希望と期待が、われわれ自身の晴れやかな人生の門出と共に開かれるかに見えた、あの世界の春の時代へと戻ることを。フランスがその陽気な空の下で自分の子供たちに等しく祝福を分かち与えたあの時。旅人はその国のあらゆる村々で新しい黄金時代を祝うダンスと祝祭の歌に出迎えられ、世を離れ黙想にふける学究の目には人間の幸福と栄光の展望が、まるでヤコブの梯子のようにまぶしく果てしなく続くかに見えたのだ。あの日の夜明けは、突然に暗い雲で覆われた。希望の季節は過ぎ去った。それはわれわれの他の夢もろともに消え去った。もはや呼び戻すことはできないが、それは痕跡

を残しており、その痕跡は誕生日のオードやキリスト教会で歌われる神の賛歌によっても消し去られることはない。あの希望に対しては、永遠の哀惜が当然だ。あの希望を、達成されるのを怖れて悪意を持って故意に打ち砕いた者たちに対して確かに抱くのは、――永久（とわ）に変わらぬ憎悪と軽蔑だ。（19：18）

ハズリットの声は、激しく、美しく、哀切である。これは同じ夢を抱き、同じ時代に青春を生きた者としてのワーズワスへの呼びかけであり問いかけである。この問いが己の若い時代を知っている年下の人間から発せられたのを知った時、詩人のこころがかき乱されないはずはない。それを自分への糾弾と受け止め、そのことについてハズリットを憎んだとしても不思議ではないだろう。

“On the Living Poets” (1818)：自己中心性（エゴティズム）への批判

さて、*Excursion* 批評から約４年後、ハズリットはロンドンのサリー協会でイギリス詩人についての８回にわたる連続講義を行う。それはちょうどワーズワスとハズリットの間の関係が最悪の時期であったが、“On the Living Poets”（「当代の詩人たち」）と題したその最終回の講義において、ハズリットは「現存する最も独創的な詩人」として最も高い称讃と多くの言葉を、ほかならぬワーズワスに献じている。なかでも *Lyrical Ballads* の中の優れた作品は、「現代においていかなる詩人が成し遂げあるいは試みたよりもより繊細で深い思想と感情の鉱脈を開いた。かれは同時代のだれよりも深い印象をより小さなサークル内に生み出した」と語り始める。（ただしそれに続けてワーズワスの能力の欠けている点として、大きな全体を構築することができない点を挙げ、*Excursion* は、ちょうど砂浜にはまり込んで動かないロビンソン・クルーソーのボートのように、進展することがないと指摘するのではあるが。）そしてワーズワスの作品はほとんど世に知られていないことを理由に、優れた作品の例として、

180 行にもおよぶ“Hart-leap Well”全詩の朗読を行うのである。[14]

だがこの講義においてワーズワスを論じるハズリットのトーンは、*Excursion* 批評よりも辛辣さを増していると言わざるを得ない。ここではかれはワーズワス個人を分析する形を避け、（ワーズワスはその一派の筆頭であると最初に明言したうえで）あえて“Lake school”（湖畔派）を批評の対象として論じている。「湖畔派」とは、『エディンバラ・レヴュー』誌がかれら（つまりワーズワス、コウルリッジ、サウジーなど）をひとまとめにして批判的、侮蔑的に呼んだ呼び名であったことを考えると、ハズリットの論調の冷たさがわかる。[15]

さらにこの講義では、かれらとフランス革命との関係という一つの背景的事実が前景に持ち出され、革命のイメージが議論全体を覆っている。コウルリッジは反動的貴族の庇護を受け、また 1813 年からはサウジーは桂冠詩人として、そしてワーズワスも官職を得て、トーリー党政権の国家から報酬を得る身分になっていたことを考えれば、ハズリットがかれらについての批評を、「この詩の一派は、フランス革命を、あるいはむしろその革命を生み出した感情や意見を起源とした」と語り始めたとき、果たしてそこに含まれた辛辣な皮肉に気づかぬ聴衆がいただろうか。（5：161）かれらの文学上の変革は政治の革命と「手に手を取って」進められたとハズリットは言う。（5：161）そしてかれらは「純粋な人道主義（ヒューマニティ）の上に、新しい一派を作り上げた」（5：162）と続けるのである。「人道主義」と言う革命の精神につながる言葉を用いて、ハズリットは特にワーズワスの題材の選択、つまり無教養な下層の人間を好んで描いたことへの批判をここでも繰り返す。つまりかれ（ら）がジプシーや白痴の少年や狂った母親までも主人公に描いたのは、題材がつまらなければそれだけ一層そこに作者自身の思考や空想を入れる余地が広がるからであり、かれ（ら）には歴史上の人物であれ空想であれ、偉大な個人は用がないのだと、題材の選択と作者の尊大な自己中心主義との関連を指摘するのである。

> かれらにとっては、普通の人間以上の人間は意味がない。かれらは自分が最も平凡な人々とのみ近縁であると主張する。農夫、行商人、そして村の床屋がかれらの託宣者であり親友なのだ。かれらの詩は、自らそう公言する極端さにおいて、またその結果において、自然と社会のあらゆる区別を取り払い平等にする。(5：163)

ここでハズリットはルソーを引き合いに出し、かれらはルソーが社会について主張したのと同じように、文学において「詩を原始的な単純さ、自然状態へと逆戻りさせること」を目指したと指摘する。なぜならそのことによって「この世で注目に値する唯一のことは、その詩を生み出した人間になる」からである。

「詩と博愛事業のこの一派の大家は」とワーズワスをあてこすってハズリットは続ける、「自分以外のいかなる卓越も嫉妬するのだ」(5：163) と。そしてここからは主語が「かれら」から「かれ」に変わって明らかなワーズワス批判となり、博愛的平等主義の裏側にあるかれの他者への嫉妬心に容赦なく光が当てられ、作品の自己中心的性格が、他者の優越を妬む作者の狭量な尊大さに帰せられる。それによって、1814 年の *Excursion* 批評と論点はほとんど変わらないにもかかわらず、ハズリットの批判のトーンは苛烈さを増し、ほとんどワーズワスという人格に対する攻撃へと突き進むかに見える。

> かれは自分が作り出したものしか許容できない。かれが共感するのは、自分と競い合うことのできないもの、「裸の木と山、そして緑の野の草」だけだ。かれは自分自身と宇宙以外何も見ない。かれはあらゆる偉大さ、そして偉大さを気取ることを、根拠があろうとなかろうと、すべて嫌う。かれの自己中心主義(エゴティズム)はいくつかの点において狂気である。かれは己自身への称讃ですら、誰かが自分を理解するに十分な鑑識眼とセンスをもっ

ていると厚かましくも考えているとして、さげすみ拒絶するのである。(5：163)

「己自身への称讃」というのは、もちろんハズリットの *Excursion* 批評を指している。ワーズワスの自己中心主義を「狂気」とまで呼ぶ激しさにわれわれは、ハズリットの批評に対するワーズワスの反応、そしてとりわけかれの評判を貶めようとしたワーズワスの報復的行為が、ハズリットのこころにどれほど深い傷を与え、怒りを燃え立たせたかということに、改めて思いいたるのである。自己以外に関心を持たないどころか、いかなる他者の卓越も妬み嫌うワーズワスの狭量さが、さらに“hate”という言葉の強烈な連打となって講義堂に響き渡る――。

> かれはあらゆる科学あらゆる芸術を嫌う。化学を嫌い貝類学を嫌い、ヴォルテールを嫌い、サー・アイザック・ニュートンを嫌う。知恵を嫌い、ウィットを嫌う。難解だとかれが言う形而上学を嫌い、ただしそれを自分が理解していると思われることを欲する。かれは散文を嫌う。自分のもの以外のすべての詩を嫌う。シェイクスピアの対話を嫌う。音楽、ダンス、絵画を嫌う。ルーベンスを嫌い、レンブラントを嫌う。ラファエロを嫌い、ティツィアーノを嫌う。ファン・ダイクを嫌う。古代様式を嫌う。ベルヴェデーレのアポロンを嫌う。メディチ家のヴィーナスを嫌う。(5：163-164)

このくだりはハズリットが勝手に作り上げた歪んだワーズワス像というよりは、むしろ実際のワーズワスの態度に近いことが、ワーズワスの肖像画を製作しようとしていた若い頃の自分とワーズワスとの対話を述懐するハズリットの文章から推測できる。[16] だが、そのような過去の個人的な会話を公衆の前に持

ち出し、批判の光に晒したことは、ワーズワスが自分に対して行った個人的な中傷への報復ともとれるだろう。そしてハズリットはこの“hate”の羅列の締めくくりとして、「かれの作品に関心を寄せる人が非常に少ないのはそのせいである、つまりかれは他人が関心を寄せるどんなものにも関心を抱かないからである」と冷たく突き放し、少し前に述べた「最も独創的詩人」としてのワーズワスへの称讃は、少なくとも講義における印象としては完全に帳消しにされてしまうのである。

“On Genius and Common Sense”(1821): 天才としてのワーズワス

しかしわれわれはここで、トーンの変化はあるにせよ、ハズリットが終始一貫してワーズワスを「独創的詩人」と評価していた点を改めて確認する必要があるだろう。それがハズリットにとって最大級の讃辞であり、「天才」と同義であったことが、1821年に出版されたハズリットの評論集 *Table-Talk* 第一巻に収められた“On Genius and Common Sense”(「天才と常識について」)において明らかになるからであり、この評論でワーズワスはまさしく「天才」の一人として扱われているからである。

その中でハズリットは、真の天才を「自然におけるなにか新しい、際立った特質に応答しそれを引き出す、精神の強い特質」(8：42)と定義する。それは想像力とも言いかえられるが、想像力の強さは感情の強さと深さに比例している。つまり天才は強烈な自我を持つのであり、そのためその作品中に「自己自身の感情や人格、あるいはある卓越した支配的情念」を持ち込まないことは稀である。たとえばミルトンの『失楽園』の主要な登場人物やできごとの中には、作者の傾向(バイアス)や意見が読み取れるというのである。

われわれにとって興味深いのは、ここでハズリットが天才の想像力を無私的なものとせず、むしろ自己中心的な強い自我と結びつけている点である。そしてそのような「天才の定義を超えた天才」として、本論のはじめに触れたシェ

イクスピアの変幻自在に登場人物に自己移入しきる無私的想像力が言及されるのである。つまり、シェイクスピアは「ほとんど唯一人の」例外的超天才なのであり、「普通の天才はもっと頑固で融通のきかないもの」、「自己自身以外のすべての優秀さに目を閉ざすことによって、ある一つのことの遂行に秀でている」ものだというのである。(8: 42)　己の外の状況に合わせて自由に色を変える「カメレオン」のごときシェイクスピアとは対照的に、普通の天才は「己の色を己を取り巻くすべてのものに与える」のである。

これを読むと、このハズリットの天才論が、かれがこれまでワーズワスについて論じてきたことと重なることにわれわれは気づくだろう。たしかにハズリットはこれまで、つまり 1814 年の *Excursion* 批評においてもまた 1818 年の講義においても、ワーズワスを“original”な詩人だと明言してきた（19：11；5：156）が、この天才論では、“originality”が明確に天才の特質として語られている。ではその「独創性」とは何を意味しているのだろうか。ハズリットはレンブラントを例に挙げて、独創性を以下のように説明している。

> かれは自己自身の世界に生き、それを他者に明らかに示した。そして自然についての新しい見方を発明したと言えるだろう。かれは何かを自然から、物語や妖精の国の中に、発見したのではなかったし、「凹凸だらけの天球に新しい大陸や川や山を見つけるために」月へ旅することもしなかったが、かれ以前には誰もが見逃していたものを自然の中に見、他の人たちにそれを見る目を与えたのだ。これが独創性の試金石であり勝利である。つまりこれまで存在したことがなかったもの、またそれゆえわれわれがそれほど容易く夢に見ることはできなかったものをわれわれに示すのではなく、われわれの眼前にあるいは足元に在るもの、しかしわれわれにはそれをしっかりと捉えるに十分なだけの直感力と精神の把握力が欠けているため、それに気づくことがなかったものをわれわれに

指し示すことである。(8：43)

これに続けてハズリットは、ワーズワスもまたレンブラントと同様に「何か重要なことを無から、すなわちかれ自身から作り出す能力を有している」として、ワーズワスへと話題を転じる。この評論の中でワーズワスは、紛れもない「天才」の一人として、他の誰よりも多くの言葉を割いて語られ、最大級の賛辞が与えられる。そしてここではワーズワスの天才がかれの自己中心的性格に由来することが、皮肉抜きに真摯なトーンで論じられるのである。

> かれは最も偉大な詩人、すなわち、今日の最も独創的な詩人であるが、それはひとえにかれが最も偉大な自己中心主義者（エゴティスト）であるがためである。［　略　］かれは己の全身の姿について思索する。己のアイデンティティーの途切れることのない連続をたどる。かれは己自身の存在について思いにふけることができるようにと、その存在に含まれた思考の宝物を掘り出すことができるようにと、また絶えず己自身に思いめぐらす精神の貴い蓄えを解き明かすことができるようにと、他のすべてのもの、他のすべての関心事を侮蔑と短気で脇へ押しのける。かれの天才は、かれの個人的性格の結果である。かれは何であれ出会うものすべてにその性格の、つまりその深い個人的関心の刻印を押すのである。(8：44)

「己の全身の姿について思索する（“contemplates a whole-length figure of himself”）」は、*Excursion* 批評の中の、あらゆる事物を「自分のお気に入りの思策を映す姿見（“a whole length mirror to reflect his favorite thoughts”）となす」(19：16）という一節と響き合っている。しかしここでは、自己の外のすべてのものに自己を押し付ける自己中心主義の横柄さへの批判ではなく、むしろ自己という暗い森に分け入り、その深奥に秘められた宝を掘り当てる思索

の深さ、その徹底した集中力が、ワーズワスを天才たらしめている「強さ」として肯定的に捉えられている。「たとえこの世にかれ以外の存在が一つもなかったとしても、ワーズワス氏の詩はまさに今あるものと同じだったろう」(8：44）と想像されるのである。

シェイクスピアの独創性が、共感能力による他者の創造であったのとは対照的に、ワーズワスの独創性とは、自己自身へと集中することによって、自然の事物がかれのアイデンティティーの連続性の中に組み入れられ、「連想の鎖」(8：45）によってかれ自身の過去の記憶を語るものとなったことである。そのようにしてワーズワスが素朴な自然の事物の中に言葉を、そして思想を見出したことを、ハズリットは再び「オード」の最終行を引いて次のように詩的に語る。

> 外的な対象を嫌い、つねに己自身の働きに没頭する精神をもって、かれは自己の過去と結びついたあらゆる些細な状況に思考と感情の重みを与える。郭公の鳴き声は、かれの耳には昔日の声のように響く。雛菊は、かれの思慮深いまなざしから流れ出る少年の日の喜びの光の中で花開く。虹はただ幼年時代から大人に至るかれの進歩を示すため、その誇らしいアーチを天にかける。年老いたサンザシの木はかれがそれにまつわらせた多くの連想の下に埋められ、押しつぶされる。そしてかれにとっては、かれ自ら美しく語るように、
>
> ——「路傍に咲くありふれた花ですら、
> しばしば涙よりも深い思考をもたらすのだ」(8：44)

「オード」の同じ詩行が、ここでは *Excursion* 批評におけるよりも一層広がりを持って響いてくる。それは、一言でいえば時間の広がりである。つまりありふれた自然の事物は、単に詩人の内面を映し、詩人の思考の崇高な高みに引き上

げられるというだけではない。詩人の自己への関心、その時の感情が静かに自然の事物に移し入れられることで、それはこころをかき乱すことのない「連想の鎖」となる。つまり、詩人の魂のアイデンティティー、その歴史を伝えるものとなるのである。ハズリットはそれが「ワーズワス氏の精神と詩における目ざましい特徴」なのだと言う。たしかにその「強み」は、自己以外のものにいっさい関心を寄せない自己中心主義の「過剰な弱さから生じた」のではあるが、「しかし」――とハズリットはきわめて穏やかなトーンで、ワーズワスの天才の独創性に称讃の言葉を捧げる――

> しかしかれは人間のこころに新しい道を開いたのである。「詩に献じられ、永遠(とわ)の名声の疑いない」、自然のもう一つの秘密の奥まった場所を探索したのだ。(8：45)

そしてこの評論でのワーズワスへの言及の締めくくりに、ハズリットはワーズワスに対する自分の個人的な感情を驚くほどの率直さで打ち明けると同時に、批評家としての信念を語っている。それは、人間精神の、あるいは想像力の「無私性」(“disinterestedness”)を信じる批評家としてのハズリットにふさわしい矜恃だったと言えるだろう。

> ここで語ってきた作者ほど、私が失望させられた人はいなかった。またある時点においてこれほど喧嘩をしたくなった相手はいなかった。しかしこの評論に私を向かわせた真実と公正さへの愛のゆえに、わたしはかれの長所を見て見ぬふりをすることはしないだろう。(8：45)

おわりに

以上が、同時代の批評家からのワーズワスへの主な批評の内容である。おそ

らくわれわれは、ワーズワスの作品の出版と同時に、すでにこのような形で、ワーズワスの詩の特質を明快に捉えた批評が書かれていたことに驚きを禁じ得ないだろう。「このような形で」とはつまり、「共感」と「仁愛」に重きを置くスコットランド啓蒙思想の伝統の延長上に立つ批評家によって、ワーズワスが、ひたすら「自己」に沈潜することによって人間のこころの奥まった新しい領域を開拓したことが素直な感嘆をもって認識され、新しい「自我の文学」の誕生が記録されたということである。それは裏返せば、ロマン派と呼ばれる時代の文学（批評も含めた広い意味での文学）が、――たとえばハズリットの自我を否定する無私性の想像力論が、キーツにいかに大きな影響力を与えたかを思い起こすだけでも――、決して一枚岩ではなかったことを示すものと言える。また、かれの批評を受けたワーズワスの過敏な反応を考えれば、ハズリットの思想のワーズワスへの影響も、看過されてはならないだろう。だがロマン主義文学におけるハズリットの存在は20世紀の終わりに至るまで長らく軽視され、ハズリットの批評がロマン主義とそれ以降の個々の文学に与えた影響については、キーツを除いては、まだ今後の研究の課題として残されていると言える。そして何よりも、ハズリットの批評そのものの魅力がもっと評価され、その肉声を間近で聞くような、美しく、果敢で、皮肉のきいた独特の雄弁なスタイルの名文が、現代にも多くの読者を見出してよいはずだと思われるのである。

注

1　See A. C. Grayling, *The Quarrel of the Age: The Life and Times of William Hazlitt* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1985), p. 181.

2　以下、ハズリットの引用はすべてP. P. Howe編纂の全集からとし、本文中の括弧内にその巻数：該当ページを記す。

3　Cf. Grayling, 184. ただし批評文の筆者がハズリットであることを知った瞬間に、ワーズワスの喜びは激怒へと急変した。二人の個人的な関係がハズリットの批評に与えた影響については後に触れる。

4　Cf. 松家理恵「ハズリットの『試論』における未来の自己の他者性と無私的想像力」、『国際文化学研究』45 号（神戸大学国際文化学研究科、2015）、69-86.

5　Cf. James Engell, *The Creative Imagination: Enlightenment to Romanticism* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1981), 198.

6　ハズリットはここで *Excursion* の対話を“these interlocutions between Lucius and Caius”と呼ぶ。(19：11) これは 1803 年にハズリットがワーズワスの肖像画を描こうとしてグラスミアのワーズワスを訪ねた時の会話に由来する。それが強烈な皮肉であるのは、この時、ハズリットはニュートンをはじめ傑出した天才を次々と話題に挙げたが、ワーズワスはそのことごとくを批判的な言葉で拒絶し、シェイクスピアの段になると、『ジュリアス・シーザー』の陰謀者たちの名を取り違えて「ルシアスとケイアスの会話は嫌いだ」と言ったのである。後で触れるが、この時の会話は 4 年後の講義の中でワーズワス批判の道具として大きく取り上げられることになる。See Hazlitt, “A Reply to Z” (9：5).

7　See David Bromwich, *Hazlitt: The Mind of a Critic* (New York: Oxford University Press, 1983), 160-161.

8　Hazlitt, “A Reply to ‘Z’”, 9：4. Also see Dunsan Wu, *William Hazlitt：The First Modern Man* (Oxford：Oxford University Press, 2008), 12-14. Wu は、ワーズワスがドイツの大学で哲学を勉強しようとした背景に、この出来事の影響を見ている。

9　See Grayling, 182-185. 1803 年のケズウィックでの騒動については、Wu, 98-99；Grayling, 89-90 を見よ。また、この時一緒にハズリットの批評を読んだ友人（Wilson）は、1818 年のハズリットのエッセイ“On the Ignorance of the Learned”を自己への侮辱と曲解し、その腹いせにこの昔のエピソードをハズリット攻撃の武器として利用し、ハズリットが非道徳的な色情狂であるという噂を出版界および一般読者に広めた。その結果ハズリットは精神的経済的に大きな打撃を受け、裁判沙汰にまで発展することになる。Cf. Wu, 254-260.

10　Cf. Grayling, 184.

11　See Grayling, 185.

12　ハズリットの引用には、明記されない形で行の省略あるいは脱落がある。引用箇所は、*Excursion*, III, 715-730, 732-736, 742-747, 757-760, 762-766, 776-787.

　共和主義者の元牧師で詩人の Joseph Fawcett がこの Solitary のモデルと考えられているが、ハズリットが「無私的共感」の人として敬愛し、またワーズワス自身 1790 年代にはその説教を聞いて影響を受けていていたフォーセットをそのように突き放して批判的に描いている点もハズリットの憤りの一因として挙げられる。Cf. Bromwich, 171-175；Tom Paulin, *The Day-Star of Liberty: William Hazlitt's Radical Style* (London:

Faber and Faber, 1998), 71-72.

13　ハズリットの引用は、*Excursion*, IV, 261-274, 297-310.

14　ただしここで朗読の名手のハズリットは、この詩の教訓的なトーンの最終部がワーズワス自身の声を表していることを巧みに聴衆に伝えただろうと、ブロムウィッチは推測している。そうだとすると、この詩もまた、つまらない題材を選ぶことによって、それを意味づける詩人自身の思想が重要となるというハズリットの議論を証明する具体例だという印象を聴き手に与えることになる。See Bromwich, 151-152.

15　冷たさは、ここでかれらの名を挙げることなく、「現在の桂冠詩人と *Lyrical Ballads* の二人の作者」という呼び方をしているところにも感じ取られる。(5：162)

16　Cf. Hazlitt, "A Reply to Z" (9：5)；Wu, 92-93.

引用文献

Bromwich, David. *Hazlitt: The Mind of a Critic*. New York: Oxford University Press, 1983.

Engell, James. *The Creative Imagination: Enlightenment to Romanticism*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1981.

Grayling, A. C. *The Quarrel of the Age: The Life and Times of William Hazlitt*. London: Weidenfeld & Nicolson, 2000.

Hazlitt, William. *The Complete Works of William Hazlitt*. 21 vols. P. P. Howe ed. London, 1930-40; rpt. Tokyo: Yushodo Booksellers, 1967.

----------. *An Essay on the Principles of Human Action. Works*. Vol. 1, 1-91.

----------. "Character of Mr. Wordsworth's New Poem." *The Excursion. Works*. Vol. 19, 9-25.

----------. "Observations on Mr. Wordsworth's Poem *The Excursion*." In *The Round Table. Work*s. Vol. 4, 111-125.

----------. "On the Living Poet." *Lectures on the English Poets. Works*. Vol. 5, 143-168.

----------. "On Genius and Common Sense." *Table-Talk; or, Original Essays. Works*. Vol. 8, 31-50.

----------. "A Reply to Z." *Works*. Vol. 9, 3-10.

松家理恵.「ハズリットの『試論』における未来の自己の他者性と無私的想像力」.『国際文化学研究』45 号. 神戸大学大学院国際文化学研究科, 69-86.

Paulin, Tom. *The Day-Star of Liberty: William Hazlitt's Radical Style*. London: Faber

and Faber, 1998.
Wordsworth, William. *The Excursion*. Sally Bushell, James A. Butler, and Michael C. Jaye ed. Ithaca: Cornel University Press, 2007.
Wu, Duncan. *William Hazlitt: The First Modern Man*. Oxford: Oxford University Press, 2008.

※本研究は JSPS 科研費 26580051 の助成を受けたものです。

（まつや・りえ　英文学）